

平成25年度

八雲をよむ

感想文・作詞・詩
入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、現在の「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とする様々な事業を行っています。

この一環として、昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ 感想文、作詞・詩募集」も今年で二十八回目となりました。今回も、感想文六十九点、作詞・詩五点、合計七十四点の力作をお寄せいただきました。

この作品集では、応募作品のうち優秀賞及び優良賞を受賞した九点の作品を掲載しています。ぜひ多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

最後になりますが、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

平成二十六年三月

主催 松江市

松江市教育委員会
八雲会

後援 毎日新聞社
BSS山陰放送

目次

第28回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉

ろくろ首の気持ち

松江市立八雲小学校 三年 石倉 要…………… 1

〈優良賞〉

ぼくと八雲の帰る場所

松江市立玉湯小学校 三年 新宮 開…………… 2

★中学生の部

〈優秀賞〉

小泉八雲の居場所

西武学園文理中学校(埼玉県) 三年 荒 舩 萌 里…………… 3

〈優良賞〉

怪談を読んで

松江市立宍道中学校 一年 宍 道 未 沙 希…………… 4

★高校生の部

〈優秀賞〉

「怪談・奇談」から思う

学習院女子高等科(東京都) 二年 田 中 里 奈…………… 5

★一般の部

〈優秀賞〉

八雲の心に寄り添って

広島県広島市 長 松 美 登 鯉…………… 7

〈優良賞〉

私の新発見・2 「漂流」

埼玉県越谷市 森 とし子…………… 9

第28回 作詞・詩 入賞者

〈優秀賞〉

「橋の上のヘルン」

東京都武蔵野市 本 田 しおん…………… 11

〈優良賞〉

ひまわり

神奈川県横浜市 草 野 理 恵 子…………… 12

講 評…………… 14

感
想
文

小学生の部

〈優秀賞〉

ろくろ首の気持ち

松江市立八雲小学校三年 石倉 要

ぼくは、夏休みにれきし館の「小さい八雲KWAIDANの世界」をみに行きました。人気の吉田くんが、六つのかい談を短く、分かりやすく、おもしろいを入れてしようかしていました。その中で一番気になったのは、「ろくろ首」でした。吉田くんは、「ろくろ首はのびる首だと思っていましたが、首がはなれるろくろ首もあるんですね。」とコメントしていました。ぼくは、本当にそうだ、ふしぎだと思いました。

このイベントには、はまったぼくは、もう一度れきし館に行ったり、「ゴーストハンター」にさんかしたりしました。そして、ついにゆう気を出して「ろくろ首」を読んでもることにしました。

読みはじめると、やっぱりこわすぎて、「ギャー」とさげんできました。こわいけれど読みたい、これがかい談のおもしろいところですよ。

一番さげんだのは、おぼろさんの回りゆうが、首のないどう体五体をあんどんのほかげに見たところですよ。ぼくだったら、にげ出してしまいます。でも、回りゆうは、元ぶしでもきもが太かった

ので、人ごろしのようなげん場を調査することができました。それに、中国の書物を読んでいたもので、五体がろくろ首のどう体であることをつきとめました。ろくろ首にねらわれていることがわかった回りゆうは、そのどう体をい動させて、二度と首と合体させない作せんを実行しました。この作せんに負けたろくろ首は、回りゆうのそでにかみついたまま二度とはなれませんでした。ものすごくらんでいたと思います。

ぼくは、れきしが大きすぎて、いろいろなしろやたたかいを研究しています。おか山のびつ中高松じようには、ひでよしに水ぜめされた、し水むねはるの首づかどうづかがありました。立ばな五りんとうでした。むねはるは、たくさんの人の命をまもるために船の上で切ぶくしました。むねはるの強い心は、ひでよしの心にもひびいて、首づかが作られました。むかしは、たたかひの中で、どう体と首をべつべつにしてうめることがありました。だから、首がはなれる「ろくろ首」のようなゴーストができたぼくは思っています。

八雲の「ろくろ首」も、さい後には首づかを作ってもらいました。きつと、むねはるのような五りんとうだっと思えます。ぶしらしいはかを作ってもらったことで、ろくろ首もすつきりした気持ちになったはずですよ。

ぼくは、「ろくろ首」を読んで、ぶしの強い心と弱くてさびしい心の両方がわかりました。そして、むかしの人の気持ちちが今の時代の人たちにつたわるように、れきし研究をつづけたいと思えました。気づかれないいろいろな思いを、大事につたえていきたいです。

〈優良賞〉

ぼくと八雲の帰る場所

松江市立玉湯小学校三年 新 宮 開

ぼくは二期から、松江の小学校に通っている。校庭には、じいちゃんもお父さんも遊んだ大きなセンドンの木がある。休み時間にたまに登ると、山いんの空がより近くに感じられる。松江の冬は寒くてくもりの日が多い。でもそんな日、ぶあつい雲の間からうすい光がさす様子は、まるで出雲の神様がおりてくるかも、と思うほどの美しさだ。八雲もきつとこのけしきが大好きだったにちがいない。

小さい時から長い休みには松江ですごすことが多かったのですが、ここが小泉八雲とつながりの深い土地だ、ということは知っていた。「耳なし芳一」や「雪女」も読んだ。でも、八雲については、かわいお話を書く外国の人とか、どうして横顔の写真ばかりなのかなあ、くらいにしか思っていなかった。

転校してまもなく本をかりるとき、先生のすすめもあって、八雲の本を読みはじめた。おもしろくて止まらなくなった。「怪談」はこわい話ばかりではなくて、昔の日本人のやさしい心や、各地の言い伝え、大事なことを八雲の考えを入れながらまとめたものだった。なかでも織田信長や明智光秀がふしぎな老人とちえをぶつけ合う「果心居士」が気に入った。さいごに老人がびよう風にかかれた

船に消えていく場面までドキドキする。

八雲をもっと知りたくて、伝記も読んでみた。八雲はお父さん、お母さんと小さい時にわかれ、いろんな所でさみしく生きてきた。八雲の写真がいつも横顔なのは、学生の時にここで左目をなくし、それが心のきずとなっていたためだと知った。でも八雲は落ちこんでばかりいない。外国語を進んでおぼえ、行ったところで助けられる人を見つけ、自分のしたい「書くこと」を仕事にした。そして、あこがれていた日本という国に、記者として行けるチャンスまでつかんでしまった。この行動力は本当にかっこいい。

ぼくはお母さんから、八雲が日本での生活の中で思ったことを書いた「日本の面影」という本を教えてもらった。少しむずかしかったけど、出雲大社や松江大橋など、知っている地名がたくさん出てきて、昔の島根を旅しているようだった。そして、八雲が松江をさる時に、英語を教えた学生たちに向けて書いた「さようなら」がとても心にのこった。

八雲は家族も見つけて、あんなに好きだった松江をどうしてはなれたのだろう。寒さやお給料、病気、いろんな理由はあるけれど、ぼくはやっぱ、八雲が松江のけしきや人々と出会って、ここが自分を温かくむかえてくれるふるさとだ、という気持ちを持ってたから、次の場所にうつることができたのだと思う。

ぼくもいつかは、松江をはなれることになる。また八雲のように、外国語を学んで、いろんな国に出かけて、人と話をし、初めてのものを見て、自分の世界を広げてみたい。そんなことを今考えら

れるのは、ほくもこのまちや人が大好きで、ほくにはいつでも帰れる場所がある、と思えるようになったからだ。

中学生の部

〈優秀賞〉

小泉八雲の居場所

西武学園文理中学校(埼玉県) 三年 荒 船 萌 里

小泉八雲はアイルランドから飛び出して異国を回り、日本へ来た。日本人と結婚して、その後の人生を日本で過ごしているのだから、辿り着いたという方が適切だろうか。それにしてもいくつかの国を一人で回り歩いたことはすごい。私自身、過去に四つの国に行ったことがある。いづれもそれぞれ違う大陸に属していて、言語はもちろん、文化も人種も全く違った。そのうち、二回ホームステイを経験した。アメリカとオーストラリアでだ。その二ヶ国は、公用語は同じだし、国民の外見も特に区別がつかない。しかし、実際に彼らと一つ屋根の下で暮らしてみてもわかったが、国民性や周りの環境がまるで違う。アメリカ人は、いつもどこかせかせかしていて、目的を持った行動をとる。オーストラリア人は、第一におおらか、第二におおらか、そして三時から四時には学校や仕事から帰ってきて、八時に寝てしまうという調子だ。一見見分けがつかない

二ヶ国だが、蓋を開けてみると全然違う。だからこちらの接し方も変わってくるのだ。アメリカでのホームステイを経験した後で、オーストラリアに行つてネイティブの人々と接すると、時々あつと二つの国の国民性の違いに気づかされることがあった。正直そんな時は戸惑った。イメージしていたものとは違ったし、オーストラリアで過ごした二週間、最後までそんなことはあつた。見た目は同じ国の中身がこれ程違っているのだから、小泉八雲はアイルランドからアメリカ、アメリカから日本へと回る中で少なからずそんな戸惑いを感じてきたはずだ。アイルランドとアメリカは言葉が母国のように割と自由に伝わるという最大の強みがあるが、それらの国と日本は言語も国民性も環境も文化も風習も気候も全てが違っている。そんな中で様々な作品を残し、たくさんの人々の心に留まる人となった。海外に渡ることが好きで、最近よく作文を書くようになった私にとって、本当に感心な人だ。

この前、四歳の弟に本を読んでもとせがまれて、面倒に思いながらも本棚の前に重たい足を運んだ。たくさんの背表紙に目を通すと、どれも絵や写真でうまった読み方のわからない本ばかりだったので、違う棚に目を向けると、小泉八雲の「雪女」の絵本に目が留まった。そして弟に読み聞かせをした。絵が付いていたからか、弟に読み聞かせたからか、前に読んだ時とは違う雰囲気が出た。それから小泉八雲に関心ができた。

「雪女」は小泉八雲が妻のセツさんから聞いた日本に伝わる怪談を物語にしたものだから、話は日本を元にしてはいるのだが、日本語

というよりイソップ物語にありそうなストーリーだなと感じた部分がある。それは、吹雪の夜、帰路の途中に通る川を渡れず、仕方なく山にある小屋で寝ている茂作を雪女が息を吹きかけて殺してしまう場面だ。人間を殺してしまうというのは、日本語ではあまり見ない。いかにもイソップ物語である。しかし、雪女との約束を破って、あの日のことを話してしまった巳之吉は雪女に殺されなかった。私はここに日本人な感覚が潜んでいると思った。雪は巳之吉との間に十人の子をもうけている。雪女は母親になったのである。母であるという事実が巳之吉を殺さなかったという理由なのである。親を亡き者にするという発想は日本にはない。子どもと親の間に存在する絆は、日本人にとっては古来からある感情である。

「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも」

山上憶良の歌だ。万葉集の時代から子どもは宝なのである。その宝を生んだ親を殺すなどはとてできない。最初はヨーロッパ人の目線で書き初めた「雪女」は、最後は日本人の目線で締めくくられている。小泉八雲は、もしかしたらアイルランドやアメリカのように日本も途中経過の国で立ち寄るつもりだったのかもしれない。ところが「雪女」を書き進めるうちに気持ちが変わっていったのではないだろうか。巳之吉を残して雪女が去ってゆく最後の場面でラフカディオ・ハーンは小泉八雲になった。日本に定着することを決めた瞬間だ。

この春、私はまたオーストラリアにホームステイに行くことになっている。将来どこの国に住むのかはまだわからない。その国や場所

に定着するには、その土地の風習や考えを自分のものにしなければならぬ。これから様々な国や場所を訪れて、自分が居たい場所を見つけるつもりである。

〈優良賞〉

怪談を読んで

松江市立宍道中学校一年 宍道 未沙希

「わたくしの名はお貞です。あなたは越後の長尾長生さまでいらっしやいますね。わたくしと、夫婦の誓いをたてたお方ですわ。……」

信じられなかった。まさか前世の記憶がよみがえるなんて、本当に考えられない。

前からずっと、私にとって本は好きなものだ。だがだいたい読む本のジャンルは決まっている。読むペースも遅く、そんなにたくさんの本を読んでいくわけではない。そして今回初めて手にとったジャンルの本、「怪談」。こういう本は本当に初めてだ。一冊もこのような本を読んだことがないと思う。そんな私がこの作品を最後まで読めたのは、この作品にとてつもない魅力があったからである。

この作品は怪談集であり、たくさんの怪談がかかっている。その中で特に心に残った話は、「お貞のはなし」だ。

それはやはり、少し不気味な話だった。死んだ人間が、生まれ変

わってもう一度会いにくるなんて。だが、私はステキな話だとも思った。確かに、奇妙で考えられないような話で、信じられないようなことだが、ステキだなあと考えた。

私は前から、『運命』だったり、そういうたぐいの言葉はあまりピンとこなかった。そんなに興味もなかったし、考えたこともそんなにない。しかし、なぜかこの「お貞のはなし」には、とても興味がわいた。この話は短く、本の中でも最初の方にかけてあるが、本が読み終わってもこの話は深く、心に残っていた。

生まれ変わって、また出会う。本当に、奇跡のような話。だがこの話では、まるで導かれたかのように出会っていた。それが運命だったのかと思った。ずっとつながり合っている二人なのかなと思った。やはりステキな話だと思う。

怪談とは、不気味で奇妙なだけではないことが、よくわかった。

物語の中で中心となる、お貞と、長尾という男。この長尾という男はすごい。永い間ずっと、お貞のことを忘れることなく、お貞のことを待ち続けていた。お貞がもし生まれ変わって自分のところに来たら、夫婦になろうと誓い、それを忘れることもなかった。きっと私なら、誓いをたててもすぐに忘れてしまうのではないだろうか。そういう点でも、長尾の想いは深く、熱いなと感じた。

お貞だつてすごい。死を目前に、この世でもう一度長尾に会うといい、その何とも信じられないことを、本当にやってしまう。私はお貞が、不思議で魅力的な人だなと思った。

この作品を読んで、本当にいろんなことを考えた。いろいろな浮か

びがうってきた。

『運命』や、怪談にも、興味がわき上がり、たくさんのもを得られた気がした。

読む前と読んだ後とは、心の中の何かが違う気がする。少し、スツキリした気分である。

今後もこういった、怪談の本を読みたいと思う。怪談の本の言葉が昔の言葉であるため、現代にはない、独特なものがある、個人的に好きだ。伝わってくるものも、伝わり方も、言葉によって違う。

今回本当に、怪談を読めて良かった。本を読むと、発想力が豊かになる気がする。これからもっと本を読み、発想力を豊かにしていきたい。

高校生の部

〈優秀賞〉

「怪談・奇談」から思う

学習院女子高等科（東京都）二年 田 中 里 奈

猛暑が続くこの夏、涼しさを感じられる音楽がないかと思い、母のCD棚を覗いた。「小泉八雲の怪談によるバラード」が目に入り、背筋をぞくぞくとさせるような音楽を想像し、興味本位で聴いてみ

た。確かに不気味さもあるが、日本的音階が意外にも心を落ち着かせた。作曲者が読んだ、小泉八雲の怪談集からヒントを得て作られたものらしい。音楽作品と八雲の小説は直接結びつくものではないだろう。しかし、八雲の怪談の世界をピアノの世界を通して垣間見ることができた私は、八雲という人物、作品に興味を湧き、彼の本を読まずにはいられなくなった。

八雲は日本をこよなく愛し、広く世界に紹介した明治の文豪である。幼くして両親と別れ、四十歳で米国より来日し、日本人の妻を迎える。妻節子が愛情溢れる視点で八雲との人生を書いた「思い出の記」からは、彼の生き様がうかがえる。本の中に、八雲は怪談が大層好きで「怪談の書物は私の宝」と言っていたと書かれてある。偉大な名作が生まれる陰には、作者本人の怪談への強い思いがあったのだ。また節子が作品を生んでいく上で大切な協力者であったことも、この本から知った。節子は八雲の日常生活を支えると共に、八雲の要求に応え、作品の語り部となることで内助の功を發揮していた。八雲の作品は節子がいたからこそ生まれたとも言える。八雲の怪談に収められた話のうち、単純に怖ろしいものは数えるほどで、それ以外は恨みや欲望から生まれた怨念をテーマとしたもの、自らが亡き後も現世に生きる愛する人のために尽くそうとする幽霊や、よみがえりの話である。登場人物の女性からは典型的な古き良き日本女性をイメージさせる。八雲は節子と結婚するまでに家庭の温かさを知らなかった。来日前の生活は決して安泰ではなく、辛酸を嘗めるような生活であったようだ。そんな八雲の理想の

女性像や夫婦像への思いが、彼の作品にちりばめられているように思う。

夫婦愛を書いた「おしどり」からも、八雲の心の中に秘めた思いを感じる。雄鳥を獵師によって殺された雌鳥は、美しい女となって獵師の枕元に立って泣く。翌日獵師がその場所に行くと、雌鳥がやってきて、奇妙な目付きで見つめ、腹を嘴で引き裂き自らの命を断った。おそらく八雲夫婦はこの作品も二人三脚で協力しながら作ったに違いない。言葉の壁がありながらも一つ一つ言葉を積み重ねていく姿が想像され、八雲夫婦もまさに「おしどり」夫婦と言えよう。八雲はこの話に描かれた日本人の犠牲的な愛の精神にも深く心打たれたに違いない。また雌鳥がとった自害という出来事は、古い日本の死にまつわる徳目につながると思っていたはずだ。

自害、切腹という話は「十六桜」にもみられる。孤独な武士が桜だけを友のように思い日々語り合っていたが、ついに桜も枯れてしまった。「命と魂をお前にやるからどうかもう一度花を咲かせてくれ」と言って武士は桜の前で切腹する話だ。ここに武士と八雲自身の姿が重なってみえる。まず、両者共に桜を愛していた点があげられる。節子の本に、この桜は八雲が亡くなる二十三日前に再び咲きして、御暇乞を申しに咲いたとある。つまり節子の眼には桜が八雲に最期の別れを言いに来たように映ったのであろう。八雲がこの上なく桜を愛していたことを物語っている。当時八雲は、明治維新後の日本が西洋化されていくのを嫌っていた。古い日本の文化、精神、風景を愛していた八雲。日本の大切なものが失われていく危機

感を感じていたはずだ。八雲は美しく素晴らしい古き日本のことを、命がけて執筆し作品の中に残そうと努力した。この姿は、自身の信念に忠実に、命をかけて戦う武士の姿に通じるものがあるように思える。八雲は彼の作品を通して、この精神のあり方の大切さを訴えたかったにちがいない。

八雲は怪談を書き上げていた頃、新宿に住居を構えていた。その場所は偶然にも私が通う学校のそばである。八雲は静かで自然が豊かな田舎の風景が気に入り、この地を選んだようだ。あれから一〇〇年以上の時を経た今、八雲が愛したこの地は大きく変貌している。森はなくなり高層ビルやマンションが建ち並び、車の渋滞、夜中も電気がつく騒々しさで、お化けや妖怪も住む場所を失ってしまっただろう。周辺の自然と言えば戸山公園へ続くうっそうとした林が残るくらいで、雑司ヶ谷で眠る八雲もきっとこの変わり様を嘆いているに違いない。でも安心してほしい。八雲が残した作品は、今なお世界中の人々に愛され日本の心を伝え続けている。八雲が愛した日本の桜は、失われることなく今もお、人々に愛され咲き続けている。古き良き日本が全て失われているわけではない。

来春、雑司ヶ谷の桜並木、我が学び舎の美しい八重桜を改めて眺めてみようと思う。昔の日本人が感じた心の安らぎを私も感じつつ、どこからか八雲にもこの桜を見てもらいたいとの思いを胸に。

一般の部

〈優秀賞〉

八雲の心に寄り添って

広島県広島市 長 松 美登鯉

八雲の心の動きが読みとれる「出雲再訪」は、私にとつて、切なく心揺さぶられる感動作である。そして非常に興味深く、忘れ難い書である。

初めて来日した八雲は、松江で幸せな日々を送ること一年四か月。しかし寒い気候や諸事情で熊本、兵庫、東京へと移住。この書は東京へ向かう前、五年振りに松江を訪れた時の紀行文である。

八雲は松江を再訪する途中ずっと自問している。「あの古い町並みは今も美しく思えるだろうか。あの得も言われぬ不思議な魅力はまだ蘇ってくるだろうか」と。五年間近代化していく日本の姿を目にし、松江も変わったのではないか、もしくは自分の心が変わったのではないかという不安が過ぎつたに違いない。

小さな蒸気船が昔通りにあの古風な町へ連れて行き、以前暮らしていた頃の感覚が、両腕で抱きしめるように八雲を出迎えた時、私はほっとした。

懐かしい山並み、あちこちで立ち上る薄煙と薪のくすぶる匂い、田んぼの噺せるような泥の香、頭上で悲しげにピーヨロ、ヨロと鳴

きながら輪を描く鳶、そして三日月のようにそり返った小舟からは昔耳にした出雲節が流れてくる。町の古風な趣も昔のままだった。

何といい風景だろう。まるで八雲の帰郷を待ちわびていたかのようだ。気付けば、私も深い情緒に浸っていた。風情も伝統的製造技術も八雲が愛惜して止まぬままであったことに、私は大きく安堵したのである。

八雲にとって松江は特別な地であった。懐かしいかつての旧居、松江城、中学校、月照寺などすべて昔のまま、神社も石像も神々は世の激動にもじつと耐え抜いていた。この書を読んでいると八雲の繊細さ、やさしさが垣間見えてくる。そして八雲の強さと弱さも鮮明に感じとれる。

八雲は数多くの紀行文を書いている。どれを読んでも秀作で、紀行文の名人としての研ぎ澄まされた感性を持つていたことが窺える。華麗な文体には一緒に旅しているような感動を覚え、旅先へ直ぐにでも飛んで行きたい気持ちにさせられる。

しかしふと私は読後も忘れることのできない文に出会った。「一度愛し棄て去った土地を再び訪ね、無傷でいることはできない。何かが失われていた。何か目に見えぬもの——その不在こそが私の胸中の漠たる悲哀の源なのだ」目に見えない失われたものとは何か。初めて日本を訪れた時の印象か。初々しい心か。その時の感動か。夢のような国と描いていた日本もお伽話のような国ではなく、純朴で質実な日本人ばかりでもなかった。単なる幻想だったという失望か。私は八雲の心に寄り添いながら何度も読み返した。

旧友は温かく迎えた。松江ならではの独自の町並み、慣れ親しんだ店先、古めかしい神社仏閣、静まりかえった武家屋敷と妖精の棲んでいるようなお庭、境内の茂みから聴こえる小鳥の囀りも蟬の鳴き声も小道に匂う花の香も森や谷の鮮やかな彩りもすべて八雲がこよなく愛した過ぎし日のままだった。

八雲は失われた胸中の漠たる悲哀の源を確かめるために松江を訪れたのではないか。八雲は「近代化」「生存競争」「私欲」を極度に嫌った。その兆しを感じた時、日本への情熱が薄らぎ始めたのかも。そして幸せの原理は赤裸々な実体を深く知らないこと、「知らぬが仏」だと結論づけたのだろう。

日本人は自然を大切にはしているが、それ以上に大切なことがある。それは旧日本の知恵、「幸福の要諦は知足、即ち足るを知る」と「だと力説。心に響く言葉だ。日々の暮らしにこと欠かず、自然の恵みの素朴な喜びに満ち足りて、私欲を捨て、仲良くやってゆけば十分という精神である。

古い日本の理想こそ古今東西最も貴重な知恵であり、幸せの原点だという。「もし体質的に日本人に生れ変わるなら、喜んで古き良き日本の流儀に従う」という。八雲の理想とする気骨の精神には頭が下がる思いだ。

しかし八雲は理想に徹することはできなかった。現実には弱体質と家族との生活があった。「あの『新しい日本』の中にも何か『古き良き日本』に巡り合う幸福の機会があるだろうか」と、疑問を抱きつつ東京への移住を余儀なくされた八雲に、私は「生きるこ

との重さ」を強く感じた。

人生は理想通りにはいかないものと思いつつも、八雲の気持を思うと、切なくて胸が締めつけられる思いがした。八雲には大都市に移住せず、松江を終のすみかにしてほしかった。今八雲が生きていたら、日本をどう見るだろう。

せめて松江は八雲が愛した地として明治の風情を残してほしいと願わずにはられない。この書を通してまた少し八雲に近づけたという大きな達成感を感じた。これからも八雲の作品を一つずつかみしめていきたい。

〈優良賞〉

私の新発見・2 「漂流」

埼玉県越谷市 森 とし子

八雲の焼津滞在から生まれた作品の中で、私はこれまで「漂流」にはほとんど注目してこなかった。読んだのは一回きりである。なぜかといえば、地元の漁師・天野甚助の話を書ききしたもので、作品価値は低いと勝手に決めていたのである。

しかし、新聞記事を素材にして、まるで現場にいて見聞きしたかのように書くことが出来た八雲である。「停車場にて」はよく知られている。それを思い合わせれば、あれが単なる聞き書きであるはずがない。

私は研究者でもなく、資料的根拠は何もない。「漂流」の成立について研究書があったとしてもまだ読んでもいないのだが、このことは確信する。

一瞬、どこが創作でどこが事実なのだろうという興味があった。けれども、この作品の大部分が甚助老人の話のとおりであろうと、老人の話にヒントを得たフィクションであろうと、そこには八雲の海への想い、人間と人生の考察、彼が私たちに伝えようとしたメッセージが込められているはずである。

どこが事実でどこが創作かというようなことは、学者・研究者の方々にお任せする他はない。一読者としては、じっくりこの作品を味わい、八雲の心を読み取ることだと思った。この作品は、甚助の語りを通して、八雲が語っているのだ。

主題は何だろう。私には、「運命と努力」だと読める。嵐に襲われ、船が転覆して漂流することになったのも運命なら、船に発見され助かったのも運命である。しかし、その間必死に生きる努力を重ねた。その努力を支えたのは信仰心と仲間への思いだったと思う。

沈む船から海へ飛び込むとき、とっさの判断で甚助は一枚の船板を海へ投げ込む。これは努力である。闇夜の海でその船板が見つけて体を乗せることができたのは幸運だった。

甚助は潮に乗ろうと努力する。仲間はみな波にのまれてしまい、ただ一人海を漂うのだが、まさに「禍福はあざなえる縄のごとし」という諺の通りだった。

夜が明けても土砂降りの雨が続く。これが幸いした。激しい雨に

波があまり砕けなかったから持ちこたえられたのだという。七月という季節も幸いしたろう。

カツオノエボシに刺されて猛烈な痛みで気が付くと、船板から海へ転げ落ちていた。またはい上がる。再びうとうとする。餌と間違えた海鳥に頭をつつかれて目が覚めるという具合である。

人は運命に左右される。しかし、努力が大切だということもはっきり描かれている。

二日目、遠くに山並みが見えた。とても行き着ける距離ではないと思いつつも、その方角へ水を掻いていく。たまらない空腹とだるさをこらえて、一日中水を掻き続ける。たとえ絶望的と思えるときでも努力を怠るなという八雲のメッセージが伝わってくる。

夕方になって諦めかけたとき、船が現れる。これは幸運だが、ただ座して待っていたのではない。船の向きから、通り過ぎてしまうと判断するや、船板を捨てて泳ぎ出すのだ。自分の体を一つ、腕の力だけを頼りに泳いでいく。生きること必死に努力し、幸運をつかみ取ろうとする姿だ。

それから、テーマの底には、海の巨大さ恐ろしさに対する人間についての八雲の思いが流れていると思う。

作品は、台風の近づくなか防波堤に座って荒れ狂う海を眺めている「私」が、「怖ろしい」とつぶやくと、「もっとひどい嵐の海で二日二晩泳いだことがある」と言う甚助の言葉で始まる。

甚助は、海の巨大さ恐ろしさにも怯まず生き抜いた。運を天に任せ、神仏に祈ると共に必死の努力を続けた。八雲はその心意気、強

靱な精神と肉体に心を打たれたと思う。

海の巨大さ恐ろしさは、東日本大震災の大津波で、海のない県に育った私にもよくわかる。海は、何という人智の及ばぬ力を持っているのだろうか。

しかし、海上にいた船が押し寄せる大津波に真っ直ぐに舳先を向けて、山のような大波を乗り越えていく映像を見た。この船の舵を握っていた人はあの甚助と同じだ。怯むことなく必死の努力で舵を操作していたのだ。

人生という海を渡っていくときにも、その精神は大切だ。何が起るかわからない世の中。地震、豪雨、竜巻等の自然災害。どこか不安な政治経済。紛争の絶えない国際情勢。加えて老年を生きる今の私には、老いていく向こうに何があるかという不安も募る。

しかしこの作品から、怯むな、恐れるな、たとえ絶望的と思えるときでも努力を怠るなと、八雲に励まされる思いがしたのである。

作
詞
・
詩

〈優秀賞〉

「橋の上のヘルン」

東京都武蔵野市 本 田 しおん

新大橋に立ち 宍道湖を望むと

白く塗られた手摺りから

睦月の寒さを感じると

ハーンの抱いていた

あのえも言われぬ瑞瑞しい松江が

手袋を通し 指先から

私に染み入る

すると、

神々の国の首都の語り部となり

大橋川を渡る虎落笛もがりかえと

八百万の神のハミングが

同じものだと証明してくれる

松江大橋に立ち 宍道湖を望むと

まんなりの欄干から

如月の三寒四温のもどかしさを感じると

八雲の言っていた

あのえも言われぬ甲斐甲斐しい松江が

風となり 袖口から

私に染み入る

すると、

心の中に埋没していた憧れは

日本の心の語り部となり

行き交う松江弁を同時通訳してくれる

宍道湖大橋の真ん中に立ち

木製の手摺りの木目から

弥生の温ぬくさを感じると

ヘルンが伝えたかった

あのえも言われぬ神神しい松江が

陽光となり 襟元から

私に染み入る

すると、

一心不乱な心臓の鼓動は

明治日本の面影の語り部となり

宍道湖の湖面と漣と

大橋川の川面の漣の違いを

アイロニー交じりで説明してくれる

ハーンの愛でた松江へ

私は 五感のすべてを解き放ち

宍道湖の西日にどっぷり浸らせると

二進法が支配しているデジタルで

雁字搦めになつてゐる私の日常は

ヘルンの森羅万象に触れ

徐々に解^{ほど}けていくのが分かる

すると、

私も ぎこちない松江弁で

ヘルン旧居への道聞き

「だんだん」を使つてみる

〈優良賞〉

ひまわり

神奈川県横浜市 草野理恵子

八月のある日

腹が膨れているにすぎない私は

瞑目し続けている

松脂の匂いのこもるこの部屋で

夏草が生い茂る床の中に

たくさんの松かさをみつけた

そして私は瞑目し続けている

あるいは針の先ばかり食べている

更に腹は膨れ続け

同時に多くの松かさを拾う

その松かさに吐き出した針を刺す

その芸当を見に来るものは

また腹が膨れ針を口にしてゐる自分なのだ

その手品ともいえない見世物が

再び自分の中に反感を植える

深く深く自分の目から下のあたりを失う

黙つた

すでに存在しないそのものが歌う

なつかしくうつくしい唇を撫でる

境界が沈殿していて

死者の歌がわかる

——なのはなの

という歌いだしであつたか

——ダリアの……だったか

歌いながら静かに死んでゐる

そのものの目は鳥の薄い瞼で

ゆつくりと上下している

悪いものが殖える

その部屋の松かさを拾う

ああ ひまわりだ

思い出した

——きょう ひまわりは……と歌いだす

さびしい糸をつけて

ゆっくりと回って見せる

黄色い耳を固くして

過敏な指先を脛に置かれた

瞑目して

腹を膨らましながら

静かに死にながら

講評

《感想文》

◇小学生の部

どの作品も、小泉八雲に親しみをもち、怪談を楽しんでいる様子が伺え、好感がもてた。

優秀賞の作品「ろくろ首の気持ち」は、小泉八雲の怪談をテーマにしたイベントに参加し、そこで「ろくろ首」に興味をもったことが、本作品を読むきっかけとなった。怪談の怖さに怯えながらも、作品に描かれている武士の強い心を、今まで読んできた歴史の本とてらしあわせながら読み取っていた。

他の作品も、怪談の怖さだけでなく、登場人物の思いや背景などをしっかり読み取り、表現していた。また、八雲の伝記にまで読書を広げた作品もあった。
(講評者 井田 佳彦)

◇中学生の部

今年度は学校をあげての参加もあり、多数の応募があった。

優秀賞作品は、自身の二度の海外ホームステイ体験と、アメリカと日本と異国で暮らすハーンの姿が重ねあわせて描かれ、そこに弟に読み聞かせた「雪女」のエピソードを元に八雲の「日本人の視線」について触れた温かみのある作品である。

優良賞作品は、八雲の作品を読むことで、「怪談とは不気味で奇

妙なだけではない」ことを知り、そこからロマンや「現代にない独特なもの」を感じとった筆者の、みずみずしい感覚にあふれた作品である。

いずれも自分の言葉で素直な気持ちが語られた、中学生らしい良作である。
(講評者 原 俊行)

◇高校生の部

優秀賞作品一編のみの応募であったが、読みごたえのある優れた作品であった。

音楽のエピソードから入る導入部、妻節子の存在をからめた考察、作品世界への多角的視点からのアプローチなどを、完成された骨太な文体と構成員力で書き切ったところは高校生として水準の高いものである。

後半は自らの生活場面と照らし合わせながら、八雲の作品および日本人の心性を桜の木に象徴させて、その永却性を確信しているところは抒情性もあり、聴覚的なエピソードで始まったこの文章を視覚的に美しくまとめている。
(講評者 原 俊行)

◇一般の部

一般の部の感想文は、今年度は昨年度と同様七編だった。

優秀賞の「八雲の心に寄り添って」は、作品「出雲再訪」についての感想文である。実はこの作品は、平成二年、初めて日本で紹介された作品である。「今八雲が生きていたら、日本をどう見るだろ

う。」表現、構成とも的確な感想文である。

優良賞の「私の新発見・2『漂流』」は焼津での作品「漂流」について、テーマを「運命と努力」と位置づけ、独自の視点で感想を展開している。

佳作の「純粹の善にもっとも近い素朴な心・小泉八雲著『乙吉の達磨さん』を読んで」は作者の心が洗われたことを素直に表現している。

(講評者 日野 雅之)

《作詞・詩》

優秀賞「橋の上のヘルン」は、冬から春へと向かう松江を、新大橋・松江大橋・宍道湖大橋の三大大橋にヘルンとともに立って、五感で捉えようとした詩である。手袋を通して肌に染み入る冬の冷たさや、木製の手すりから味わう春のぬくもりなど、随所に詩的表現がちりばめられていて味わい深い。「ハーン」と「ヘルン」は表現を統一した方がよい。

優良賞「ひまわり」は、ことばの組み合わせの不思議さに詩的な面白さが宿る。容易に像を結ぶとはいいがたいことばの連なりは、読む者の予測を軽やかに裏切ることで、日常のことばとは異なる新鮮な印象をもたらしている。

佳作の「草ひばり」、「八雲は生きている」の二篇は、七五調のリズムに乗せてうまくまとめられている。

(講評者 山根 繁樹・岩田 英作)

【審査員】

井田 佳彦 岩田 英作 岡村 昌彦
酒井 抱一 原 俊行 日野 雅之
山根 繁樹 吉田 紀子
(五十音順)

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)
1891(明治24)年 小泉家蔵

平成25年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文 作詞・詩 入賞作品集**

平成26年 3月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
八 雲 会